

草の根の表現者たち (第1回)

(佐藤一子・さとうかつこ)

子ども・市民たちが演じる創作劇「遠野物語ファンタジー」40年の歩み

第40回記念「でんでらばらだいす」の上演

2015年2月21日、22日、厳寒の季節に岩手県遠野市民センターで市民創作劇「でんでらばらだいす」(二幕十場)が上演された。「遠野物語ファンタジー」第40回記念公演で、キャストは保育園児から高齢者まで27人。音楽演奏、バレエ、郷土芸能、大道具・小道具まで総勢350人、観客数2,125人、市民がひとつになって創り上げた感動の舞台であった。

「遠野物語ファンタジー」は、江戸期から遠野郷に伝わる昔話・伝説に題材をとり、原作から脚本、作詞・作曲すべて市民が創作し、市民が演じる市民劇である。昔話の世界が情感豊かに再現され、今回はじめて「ばらだいす」という英語がタイトルに用いられた。

「でんでら野」(蓮台野)では60歳を超えて村から追いやられた老人たちが、昼間は集落で農業の手伝いをしながら共同生活を送る。近くには「ダンノハナ」とよばれる共同墓地があり、柳田国男『遠野物語』111、114話に記されている。舞台では農村の嫉妬の悲しい習俗を伝える「でんでら野」のイメージを完全にくつがえし、老後を助け合い、村を思いやりながら共同生活をする高齢者たちの気持ちが、たくましくコメディ風に表現された。

原作・脚本は遠野物語ファンタジー制作委員会委員長の菅原伴耕さん。元遠野市職員で社会教育課長などを務め、現在は農業を営むシニアである。「今まで描かれたでんでら野ではなく、老人たちが楽しく暮らすでんでら野を描き出したかった。現代版老人は元気だよと伝えたかった」と脚本の構想を語る。菅原伴耕作詞・新田光志作曲「でんでら野のうた」「役人も来ねえし、年貢もねえ。稼いだ分だけわれのもの。手足も伸びるし命も伸びる。あ〜極楽、極楽…ど」を老人たちが歌い、踊る。作曲された音楽は18曲、中学・高校吹奏部、少年少女合唱隊、中学・高校合唱部・市民合唱団。そして山口集落のさんさ踊り保存会と市民センターバレエスタジオの登場。三陸沿岸被災地からの避難者や友好都市や周辺市町村から訪れた人々まで、涙と笑いと共感に包まれた舞台であった。

40年の歩みを支えた市民活動

「遠野物語ファンタジー」第1回「笛と童子」の上演は1976年3月である。1971年に岩手県内としては先進的な大ホールをもつ市民センターが建設され、語り部の鈴木サツさんがこけら落としに昔話を語ったことで注目をあびた。このホールをどう活用して市民が喜んで足を運んでくれるようにするか、当時の遠野市職員濱田栄一さんから社会教育課職員が相談し、「そうだ、大ホールがある。よし『遠野物語』を使って毎年2時間ぐらいの舞台を創ろう」と思いついたのが、市民劇「遠野物語ファンタジー」の出発であったという。

今でこそ「民話のふるさと遠野」で知られているが、当時の遠野市民で『遠野物語』を知る人はほとんどいなかった。現在のように語り部が人前で語る催しもおこなわれていない。しかし、子ども時代に祖父母から昔話を聞いた覚えのある市民は多い。また遠野市に合併した村々では青年団の演劇活動が盛んで、県大会でもたびたび優勝している。濱田さんも青年団活動の経験者であった。地区ごとに伝えられる遠野の昔話に題材をとり、原作・脚本を市民が創作し、子どもから大人まで出演する舞台を創るという着想は、衰えかけていた民衆芸能に新たな息吹を吹き込むきっかけとなった。

「遠野物語ファンタジー」の原作は毎年公募である。脚本ができあがり、出演者を公募し、11月頃から練習が始まる。バレエスタジオはセンター付設の教室であるが、それ以外はすべて参加したい市民に開かれた劇づくりであるということが、とぎれることなく40年の歩みを重ねてきた原動力であったと思われる。その活動を支えてきたのが、制作委員会である。事務局を市生涯学習スポーツ課、遠野市教育文化振興財団が担当し、脚本演出、音楽、キャスト、スタッフ、裏方など7部門が市民参加で運営されている。40年の歩みの中で舞台裏方まで含めた参加人数延べ14,434人、50を超える郷土芸能団体や芸術文化団体、婦人会・青年会の協力に支えられ、観客数は9万人以上に達している。その約9割は遠野市民である。文字通り、市民手作りで市民が皆で楽しむファンタジーなのである。

次の世代につなぐ

「遠野物語ファンタジー」を観るたびに、濱田栄一作詞・佐々木顕作曲「偲郷の歓び」の合唱に思わず涙する。「…やがて早春(はる)の雪解けが聞こえる 萌えるなかに ホラ その小さな光沢(ひかり) 優しい温もりが包む愛の歓び… サア 歌おう ラ ラアラ、ラアラ、ラアララ…」。

今、制作委員長を務める菅原さんは言う。「自分が意識しているのは、新しいことをやるのではなく、つなぐということ。次の世代につなぐこと」。しかし課題もある。急激な高齢化である。人口2万8千人の地方都市遠野の若年人口流出は深刻である。かつてのように誰でも知っていた田植え唄などを舞台上で上演することも、子どもたちにとっては初体験である。劇中で話される方言も子どもたちにとってなじみのない文化となりつつある。

「自分たちは遠野物語の世界を実体験している最後の世代」。この気概が若い世代にも伝わる。10年間ファンタジーの舞台に出演し続けた高校生が進学のため地域を出て行く。打ち上げ会で涙を見せる彼女に、大人たちは「絶対戻ってこいよ」と声をかけていた。

その熱い思いが若者の生き方を支えていくであろうことは間違いない。

<写真> 「でんでらばらだいす」の舞台風景 (遠野物語ファンタジー制作委員会提供)

